

## 普遍者の理論と種問題

倉田 剛(九州大学)

本発表で吟味してみたい問いは次のように表現される。普遍者の理論(Theory of Universals)は、生物学における「種問題」(Species Problem)との生産的な接点をもちうるのか。もしそうだとすれば、前者は後者から、いかなる条件の下で、何を、どの程度まで学ぶことができるのか。

素朴に考えると、普遍者の理論の中でも、生物種(species)に関する議論と密接な関係に立つように見えるのは、とくに類(kinds)あるいはタイプ(types)を、性質・関係とは区別される独自のカテゴリーとして要請する形而上学であろう。決して多数派とは言えないが、こうした形而上学は、主にロウ(Lowe 2006)、マイクスナー(Meixner 2004)、ウェッツェル(Wetzel 2009)などによって展開されている。彼らは、類ないしタイプを**実体的普遍者**(substantial universals)として捉え、それらを性質・関係といった**非実体的普遍者**(non-substantial universals)と区別する。(こうした区別は現代の普遍者理論において必ずしも一般的ではない(cf., Armstrong 1999).)むしろここでは、金や水といった**自然種**(自然類 natural kinds)、イヌやカエルといった生物種が、類(タイプ)の典型例として分析される。

だが残念ながら、このことを根拠に、普遍者の理論が種問題との重要な接点をもつと結論することはできない。なぜかと言えば、現代のほとんどの生物学者(および生物学の哲学者)たちにとって、もはや生物種は哲学者たちが論じるような自然種ではないからである。彼らにとって、生物種は、それに属するすべての生物個体(かつそれらのみ)が共通してもつ何らかの(内在的)性質によって定義されるものではない。これより、生物種は哲学者が特権視してきた物理・化学の領域における自然種とは異なる、というコンセンサスがすでに形成されている(ソーバー2009)。他方で、形而上学者たちの側にも、生物学の議論を一顧だにせず、生物種を従来通りの自然種として扱いつづける態度、あるいは、生物学者たちが論じる種は、類の名に値しないと断ずるといった態度が顕著に

見いだされる。

とくに後者のような態度をとるのはロウである。ロウは、生物学の哲学者デュプレの仕事(反本質主義と多元主義)を評して、「形而上学的に興味深いものはない」、「そもそも形而上学に真に関わるものではない」と述べ、さらに、共通の祖先をもつという観点から種を個別化する「系統的」アプローチについては、「生物学的な自然種タームが、部分的に進化論的由来によって決定される外延をもつという学説を私は認めない」(Lowe 1999: 187)と一蹴する。ロウのような形而上学者にとって、遠い銀河のどこかの惑星で、地球上のイヌとは形態的にも生態的にも、またDNAの構造においてもまったく区別がつかないが、しかし地球上のイヌと系統的な繋がりをもたないような生物が発見されたとしても、それはイヌであることに変わりない。(より正確に言えば、それはイヌ類(dog kind)のインスタンスである。)だが、生物学者たちにとって、それはイヌ種(dog species)に属する生物ではない。この一例でも分かるように、形而上学における類の議論と生物学における種の議論は大きなすれ違いを見せてしまうのである。

たしかにロウのこうした態度には、いたずらに経験科学の顔色を窺うことをしないという点で、形而上学者の面目躍如たるものがある。しかしながら、ここでロウの言う「類」にはある限定が加えられていることに注意しなければならない。それは「自然の」という限定である。ロウは自らが設けた類の下位区分である「非 - 自然種(類)」(Non-natural Kinds)に関しては、意図的に議論を避けているのである。ここにはロウが考える以上に大きな問題が隠されているように思われる。われわれは、非自然種あるいは「人工的タイプ」の形而上学こそが、生物学における「種問題」との生産的な関係を取り結びうると主張したい。以下でその理由のいくつか挙げておく。

(1)われわれが非自然種(人工的タイプ)として念頭に置いているのは、主に言語タイプ、車種、音楽作品(文学作品)、貨幣、国家、株式会社などであるが、これらはある時点で生成し、後のある時点において消滅しうるような存在者である。生物種についても同様のことが言われる。こうした種ないしタイプをまとめて「歴史的類」(historical kinds)と呼び、それらを「永遠的自然類(種)」(eternal natural kinds)と対比させることはもっともらしい(cf., Millikan 1999)。

(2)非自然種(人工的タイプ)のほとんどは、**系統樹**の中に位置づけられる。また、作者という起源を有するものもある。例えば、現在よく使われるいくつかの書体タイプ(フォント)が、共通の祖先をもっていたり、最新のビートルという車種が、「モデル・チェンジ」を経てきた系譜の中にあたりすることは否定しがたい。このことから、非自然種(人工的タイプ)に関しても、生物種と同様に、その「**進化**」を語りうるように思われる(cf., 三中 1997)。また、多くの音楽作品(文学作品)には、作品間の系譜関係があるだけでなく、作者・作品という由来関係も存在する。

(3)化学元素といった自然種とは異なり、非自然種(人工的タイプ)については、基本的にその境界が曖昧であるというだけでなく、そのインスタンス(トークン)がもち、かつそれらのみがもち、トリヴィアルでない性質を特定できないケースがしばしば見られる。やや極端な例ではあるが、哲学という学問タイプを考えてみよう。われわれは、何らかの思考トークンや書物トークンが「哲学」あるいは「哲学書」であるための、必要かつ十分な性質(の集まり)を特定できるであろうか。つまり程度の差こそあれ、非自然種は、**単純な本質主義**と相容れないという意味において、生物種と同様の問題を抱えている。(ただし、このことは安易な本質主義批判を直ちに導くわけではない(cf., Devitt 2008).)

(4)よく知られているように、生物学者たちの中には、生物種を**クラス**ではなく、**個体**(individuals)として捉えようとする者たちがいる(Ghiselin 1974; Hull 1976)。われわれの立場に従えば、そもそも類(タイプ)はクラスではなく**普遍者**であるが、形而上学の内部においても、類という普遍者を個体(**メレオロジカルな和**)に還元しようとする動きが<sup>つね</sup>に見られる。種問題の内部における「**個体説**」をめぐる議論の蓄積は、非自然種の形而上学に何らかの示唆を与えうるように思われる。

以上を、冒頭の問いに即して簡単に纏めてみよう。まず、普遍者の理論が種問題との生産的な接点をもちうるとすれば、それは類(タイプ)を独自のカテゴリーとして扱う形而上学の中でも、とりわけ非自然種(人工的タイプ)の問題を重要視する形而上学である。これは両者が同じ土俵にあがる**条件**と言える。次に、普遍者の理論は何を学ぶのかという点については、**網羅的**とは言い難

いが、種に関する「歴史性」、「系統関係」、「単純な本質主義からの脱却」、「個体説との折り合い」などが挙げられた。最後に「どの程度まで」という問いに関して一言述べておこう。むろん非自然種と生物種との違いは数多くあり、両者のアナロジーがあらゆる場面において通用するということはない。その違いの中でもとくに重要だと思われるのは、社会的・制度的種(タイプ)が、われわれの心の志向性にその存在を依存するということである。一例を挙げるならば、われわれの社会における家族や国民という制度的種は、個体間の類似性や系統的な繋がりのみによって個別化されうるものではない。しかしながら今回の発表では、そうした無視できない差異を念頭に置きつつも、いかにして形而上学と生物学(の哲学)という二つの領域が互いに生産的な関係に立ちうるのかという問題に焦点をあてることにしたい。

#### 主な参考文献

- Armstrong, D. M. (1989) *Universals: An Opinionated Introduction*, Boulder: Westview Press.
- Devitt, M. (2008) "Resurrecting Biological Essentialism", *Philosophy of Science* 75: 344–82.
- Dupré, J. (1981) "Natural Kinds and Biological Taxa", *The Philosophical Review* XC, No. 1: 66–90.
- Ereshefsky, M. (2002) "Species", in E. N. Zalta (ed.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, Available at: <http://plato.stanford.edu/entries/species/>
- Ghiselin, M. T. (1974) "A Radical Solution to the Species Problem", *Systematic Zoology* 23: 536–44.
- Hull, D. (1976) "Are Species Really Individuals?", *Systematic Zoology* 25: 174–91.
- Lowe, E. J. (1999) *The Possibility of Metaphysics: Substance, Identity, and Time*, Oxford: Oxford University Press.
- Lowe, J. (2006) *The Four-Category Ontology*, Oxford: Oxford University Press.
- Meixner, U. (2004) *Einführung in die Ontologie*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Millikan, R. G. (1999) "Historical Kinds and the Special Sciences", *Philosophical Studies* 95: 45–65.
- 三中信宏(1997)『生物系統学』, 東京大学出版会

ソーバー, E. (2009) 『進化論の射程—生物学の哲学入門』, 松本俊吉・網谷祐一・森元良  
太訳, 春秋社

Wetzel, L. (2009) *Types & Tokens: On Abstract Objects*, Cambridge: The MIT Press.

## 普遍をめぐる中世哲学的構図

### ——オブジェクトと普遍論争——

山内志朗(慶應義塾大学)

普遍論争とは、普遍をめぐる存在論の問題と考えられてきた。プラトンの実在論とアリストテレス的唯名論、スコトゥスの実在論とオッカムの唯名論など対比図式を設定すると問題の姿が現れてくるようで、なかなか判然と見えてくることはない。

いや、そもそも普遍とは何なのだろうか。普遍とは事物、概念、名称、名辞、述語、記号、関数、トロープのいずれなのだろう。初めから排除しておかないといけないのは、普遍とは事物や名称ではないということだ。普遍を事物と捉える実在論(実念論)や、普遍を名称と捉える唯名論は、初めから成り立たない理論であり、それらを主張した人物は存在しないと言ってもよいのではないか。ただ、実在論と唯名論という分類は、大雑把な分類としては便利なので、以下でも用いるが、実在論や唯名論ということで共通の理論があるとは考えないでほしい。語り尽くされた観があるが、普遍をめぐる問題の中心が普遍の存在とは別のところにあることは気づかれにくいままだ。

今回の普遍論争をめぐる分水嶺がどこにあるのかを中世哲学の中に探りたい。スコトゥスの実在論とオッカムの唯名論というように、そこに最大の截断を見出すことは、迷い道に入り込むことになる。

中世における普遍論の基本的枠組みとして、実在論や唯名論、そして概念論というのが忘れ去られるべき枠組みであるとして、様々な立場がある以上、それぞれを概観し、場合によっては適切な名前をつけるしかない。これは大変な

仕事である。ともかくも、問題となるのは、従来の哲学史で、十三世紀の「穏やかな実在論」と言われる立場を分類し、そしてそこにアヴィセンナとアヴェロエスの影響を組み込んだ図式を作る必要がある。そのために、有益なのが、ヨハネス・シャルペ(Johannes Sharpe)の『普遍に関する問題(Quaestio super universalis)』である。

シャルペは、1360年頃ミュンスター近郊に生まれ、1379年プラハ大学でバチエラーとなり、オックスフォードでその後の学問人生を過ごした思想家である。シャルペの没年は不詳で、1415年以降に亡くなったと推定されるだけである。彼はウィクリフの影響を強く受け、実在論の立場であり、「オックスフォード実在論者(Oxford Realists)」の一人である。イギリスと言えば、オッカムが活躍し、その後のイギリス経験論の系譜を見ても、唯名論の傾向が強いものと考えがちだが、ウィクリフにしる、シャルペやアリントン(Robert Alyngton)やペンビガール(William Penbygull)などのオックスフォード実在論のように、実在論の流れも強かったのである。

シャルペは普遍について見解を以下のように分類する。

1) ビュリダン、2) オッカム、3) ペトルス・アウレオリ、4) エギディウス・ロマヌスとアルベルトゥス・マグヌス、5) プラトン、6) ドゥンス・スコトゥス、7) ウォルター・バーレー、8) ウィクリフ、9) 自らの見解

この分類で重要なのは、普遍が実在するかどうかはあまり問題ではないということだ。もちろん、普遍とは名のみのもでもない。

問題の要となるのは、実はオブジェクト論であると言ってもよいというのが、現在の私の見通しである。オブジェクト論については、中畑正志『魂の変容：心的基礎概念の歴史的構成』(岩波書店、2011年)という名著がある。そこでの分析と結びつくところも多いが、シャルペの分類で注目したいのは、アウレオリである。ペトルス・アウレオリはドゥンス・スコトゥスとオッカムの間にあり、初期唯名論者として有名であるが、その唯名論は、志向的存在(*esse intentionale*)、仮現的存在(*esse apparens*)をめぐるものだった。なぜそのような道筋が現れるのか、一見分かりにくいだが、普遍は概念としてあるというのが、古代から近世に足るまで標準的見解なのである。これは唯名論者であろうと実在論者であろうと共通である。そして、普遍が事物としてあると述べた実在論

者はほとんど存在しないし(ウィクリフなどは別だが)、普遍が名称でしかないと述べる唯名論者も存在しないと言ってよい。

問題は概念としての普遍がいかなるものかということになる。近世に入り、スアレスは、客象的概念(*conceptus objectivus*)と形相的概念(*conceptus formalis*)に分け、普遍の問題も存在一義性の問題も、客象的概念の一性に問題の焦点を見定めた。スアレスは、アヴィセンナからヘンリクス、スコトゥス、アウレオリ、オッカムに至る問題の系譜をかなり正しく整理していると思われる。

普遍論争は、存在論というよりは、半ば認識論の問題なのである。今回の発表では、普遍論争をオブジェクト論として捉え、その基本的流れを整理することを目指したい。